

第3節 「三館」廃絶後の村々ー近世以後ー

1 上ノ国村

江戸時代の上ノ国村は、天の川流域に散在する集落と、洲根子・原歌・向浜の海岸沿いの集落を枝郷として従える藩主直轄地であった。シャクシャインの戦いの頃の『津軽一統志』は、洲根子4軒、鳥泊15軒、原歌は家40軒で住居少しと書き、上の国は140,50軒で「狢」もいると記している。

江戸初期の上ノ国村は、献上鷹の産地と知られ、天の川を遡上する鮭も「天の川奉行」が派遣されるほどに漁獲はあったが、生業としては、松前藩創業期の檜山伐採事業を管掌した「官府」の行政機構の末端に連なったり、対岸の上ノ国目名山での「檜山稼」などに従事することが多かったかと推測される。

上ノ国村は、藩政期を通じて松前家祖廟の地として厚遇されており、江戸初期には「領主御賄地」として米などの生活必需品の多くが下賜されていた可能性は否定できない（『上ノ国村史』）。

17世紀後半の元禄年間には、場所請負制のもとで鮭類が全国的な商品流通に組み込まれることになり、近江商人による操業資金の前貸しが行われ、鮭漁が発展する⁽³⁷⁾。

天明6年（1786）の『蝦夷拾遺』は、上ノ国の戸口を210余戸、人口を370余人と記し、同時代の『松前随商録』は「領主御賄地、産物 鮭秋味、此地上國ノ古城有、故一の城下なり、八幡宮鎮座、毎年正月中領主代参有、船渡場有賃拾貳文」と上ノ国の様子を書き留めている。

文化3年（1806）、西蝦夷地見分のため当地を訪れた幕府目付・遠山金四郎と勘定吟味役・村垣左太夫は「以前の家数三百軒程も有之候処、貳拾年来鮭獵無之候間村の者追々山手に引込、粟・稗等の畑作仕、今日を相凌候に付、家数も減少仕、近年別て衰微仕候由」（『遠山・村垣 西蝦夷日記』）と安永・天明期から続く鮭不漁で衰微しているさまを記している。

江差商人の「仕入」を受けた西蝦夷地への出漁は、はじめ積丹半島南の歌棄などの口蝦夷地であったと考えられているが、安永・天明期は和人地前浜での凶漁が続き、入漁はイシカリ辺アツタまで追鮭船による出稼ぎが盛んとなり、ほとんどすべての働き手が「追鮭」と称して蝦夷地への出稼ぎに向かい、村は男手のない寒村となったと考えられている⁽³⁸⁾。

上ノ国村の旧家の来歴はよく分かっていないが、布施・石黒家など信廣の渡海に随従した下北の土豪もいる。また明治になって積丹や増毛などへ転住した家もある。それらの旧家に混じって、能登屋五代目の久右衛門が文政の頃から余市に、五代目の妹婿兵右衛門が苦前に漁場を持っていたことが分かっている。

前浜での鮭漁は安政の末年から恢復したが、明治維新によるアイヌ交易独占権と流通統制に依拠した経済体制の崩壊は、松前城下はもとより西在の住人の生活を根底から揺るがす未曾有の困難であった。これにより明治以後の松前・江差地方の衰微は避けられなかった⁽³⁹⁾が、上ノ国村の生業の大宗は依然として漁撈にあった。鮭漁で謳歌した時代もあったが、大正2年（1913）を最後に鮭の群来を前浜にみることはなく、村内一と聞こえた漁業資産家が雇漁夫に転落していく有様であった。

上ノ国村は、地方行政府としての勝山館、それに続く「官府」の所在地であった。その後も上ノ国七ヶ村の首座の地位にあり、明治19年（1886）の上ノ国村外六ヶ村戸長役場の設置にあたって、役場所在地の地位を確保し、昭和42年の町制施行後も行政の中心にあったが、昭和56年の役場庁舎の移転で中心地としての地位を失い、現在は戸数・人口ともに減少している。

2 北村（喜多村）

江戸時代、洲崎の館が築造された北岸一帯は「喜多村」と称されており、地名としての初出は、元禄13年（1700）の『松前嶋郷帳』である。喜多村は、『新羅之記録』を著した松前景廣の知行地で、景廣亡き跡も代々河野系松前氏の知行地であった。景廣に留萌や天塩などとともに宛行われたのは寛永11年（1634）である（『松前町史通説編第一巻上』）。

『津軽一統志』に喜多村の名はなく、天明6年の『蝦夷拾遺』は喜多村の戸口を90戸足らず、人口を360余人と記し、文化4年（1807）の『西蝦夷地日記』は「家数六十軒程馬四拾疋餘 図合貳艘 三半壹艘 磯舟六艘」と書いた。

館跡の東方を南流する上ノ国目名川の上流域は、羅漢柏（ヒノキアスナロ）の自生地として有名で、寛永14年（1637）に焼失した福山城の修築に上ノ国目名の檜材が用いられたが、元禄8年（1695）に江差の檜樹山で火災が発生し、止々河・上の国・女奈・阿津左不諸山に延焼して、その過半が焼亡し、羅漢柏に

大打撃を与えることとなった。

また、砂礫層を多く含む下流域は、豊富で水質の良い伏流水の湧き出る沼沢や谷地が分布しており、サケの遡上する有力な河川としても知られている。『松前随商録』はキタムラの出産物を「鮭秋味・唐檜・雑木」と書く。

幕末頃の北村について、松浦武四郎は、「此村西海に枕（のぞ）ミ南東は川也。樹木多くして其中に人家一条の町をなす。西北は砂山に靠（よ）て家居する故に風当も少し。昔此村、上の国村の支郷なり・・・木古内より越来る人馬は此処にて継立る也。」（『校訂 蝦夷日誌』二編）と、砂山の蔭に家居を連ね、風除けの樹木に囲まれた一本街村状の家並みの様子を書いている。

福山城下の不動川を出発し北に向かった福山街道は北村を経由し、西在の中心地・江差に至るが、北村はまた木古内（中野）越えの起点でもあった。

現在の北村地区は、上ノ国町の中心市街地に隣接する住宅地で、およそ150～200戸程度の一軒家が旧国道に面し、新国道の両側にも宅地が造成され、新築住宅やスーパーが建ち並んだが、市街化は鈍化傾向にある。

3 向浜

洲崎の館跡がのっている砂丘列の一部が向浜海岸まで延び、天の川の潮口へと続く。その砂丘の南東側に向浜集落がひっそりと町並みを形づくっている。

向浜は江戸時代を通じて上ノ国の枝郷であったが、その成立については判然としない。大正年間には天の川の上流で切り出され、流送された材木を貯木しておく土場があり、土場に関わる柚夫たちと、彼らを相手に商売をする人たちで賑わっていたという。こうした様子は、木古内・江差間の鉄道の敷設に伴って流送が禁止される昭和初め頃まで続いた。

向浜の町並みを通る町道向浜線は福山街道の名残で、「送迎場」という別名のある旧字名「吹切（北村との字界付近）」辺りで街道は二手に分かれ、右手は館跡の南面を通過して北村へと続き、左手は海岸伝いに江差に至る近道であった。天の川北岸と南岸の上ノ国をつなぐ往還は、江戸時代の天の川の渡河手段は手繰船、馬船、船橋などであったようだ。

向浜集落の南東に広がる草地は、昭和8年に河道が切り替えられた旧目名川の河川敷地と、潟湖もしくは河跡湖が埋積された名残である。戦後撮影された米軍の空中写真には新旧2本の目名川が写っているが、旧目名川は自然に消滅していったようである。

安藤氏、武田・蠣崎氏系図



本系図は『地方別 日本の名族—東北編 I』所収の遠藤藏氏作成の「安藤・秋田氏系図」及び春日敏宏氏作成の「松前氏系図」を典拠とし、適宜補筆したものである。

上之国館跡関連略史年表

年号	西暦	事 項
文 治 5	1189	奥州合戦、源頼朝、平泉藤原氏を滅ぼす。(『吾妻鏡』) 奥州合戦の折、津軽・糠部より多数夷島へ逃げ渡る。(『新羅之記録』)
建 保 4	1216	鎌倉幕府、六波羅より引き渡しをうけた京都東寺の凶賊・強盗・海賊等 50 人に奥州に送り、追放すべきを沙汰する。(『吾妻鏡』)
建 長 3	1251	鎌倉幕府、讃岐国の海賊等の蝦夷嶋流刑を決定する。(『吾妻鏡』)
文 永 5	1268	蝦夷代官安藤五郎がエゾに首をとられる。(『日蓮聖人遺文』)
元 享 2	1322	津軽の安藤又太郎季長と安藤五郎三郎季久との間で嫡流の地位をめぐる争乱起こる(東夷蜂起)。(『保暦間記』、『諏訪大明神絵詞』、『北条九代記』、『異本伯耆巻』)
正 中 2	1325	鎌倉幕府、安藤季長に代えて安藤季久を蝦夷沙汰代官職に補す。(『北条九代記』) 安藤宗季(季久)、津軽鼻和郡網家島・尻引郷・片野辺郷、糠部宇曾利郷・中浜御牧・湊及び蝦夷の沙汰を子の犬法師に、宇曾利郷の田屋、田名部を女子のとら御前に一期分として与える譲状を書く。(『新渡戸文書』、『鎌倉遺文』)
嘉 暦 元	1326	安藤宗季と安藤季長、津軽外ヶ浜の内末部と西ヶ浜折曾間に城郭を構えて争う。翌年和睦なる。(『北条九代記』、『諏訪大明神絵詞』)
延 文 元	1356	『諏訪大明神絵詞』成立
応 永 30	1423	安藤陸奥守、室町幕府に馬 20 匹、鳥 5000 羽、鷲眼 2 万匹・海虎皮 30 枚・昆布 500 把を献上。(『後鑑』)
永 享 4	1432	安藤盛季、その子康季ら、南部氏に敗れ、十三湊を捨て、夷島に渡る。のち、安藤氏、十三湊に復帰 (『満濟准后日記』)
永 享 8	1436	奥州日之本将軍安藤康季(盛季の子)、若狭国羽賀寺を修造。(『秋田家系図』、『羽賀寺縁起』)
嘉 吉 2	1442	安藤氏、再び南部義政に敗れ、津軽十三湊を放棄し、翌年夷島に逃れる。(『新羅之記録』)
享 徳 3	1454	南部氏に捕らえられ、下北の田名部を知行していた安藤政季が脱出し、武田信廣らを随え、大畑より夷島に渡る。(『松前下国氏大系図』、『下国家系図』、『新羅之記録』、『福山秘府』)
康 正 2	1456	秋田湊の安藤堯季、安藤政季を夷島より秋田小鹿島に招き、のちに河北郡を政季に渡す。(『松前下国氏大系図』、『下国家系図』、『新羅之記録』) 安藤政季、秋田小鹿島渡海に際して、下之国・松前・上之国に守護をおく。(『松前下国氏大系図』、『下国家系図』、『新羅之記録』) 春、函館西郊志濃里の鍛冶屋村で「オッカイ」殺される。これにより東西のアイヌ蜂起。以後大永 5 年春まで戦乱が続く。生き残った者、松前と天河に集住する。(『新羅之記録』、『福山秘府』)
長 禄 元	1457	東西アイヌ蜂起、相次ぎ館を陥落。下之国の守護安藤家政と、上之国花沢館の館主蠣崎季繁は堅固に城を守る。信廣、惣大将として、コシャマイン父子を破る。(『松前年代記』、『新羅之記録』、『福山秘府』、『松前志』) 信廣、上国河北天河の洲崎に壘を築き居す。(『福山秘府』)
寛 正 3	1462	蠣崎修理太夫季繁没(この頃、花沢館廃絶か?)。(『福山秘府』) 信廣、天河の洲崎の館の北に毘沙門堂を建立す。(『松前年代記』、『新羅之記録』)
文 明 5	1473	上国館上に八幡宮を造立、館神と称す(この頃、勝山館を築造か?)。(『松前年代記』、『福山秘府』、『御巡見使応答申合書』)
文 明 14	1482	夷千島王遐叉、使者宮内卿を李氏朝鮮に派遣し大蔵経をもとめる。(『李朝実録』)
明 応 3	1494	信廣没。長男光廣(蠣崎)跡を嗣ぐ。(『松前年代記』、『新羅之記録』)
明 応 5	1496	松前守護職の下國山城守恒季自害。以後、松前守護職に相原季胤を任じ、村上政儀が補佐す。(『新羅之記録』)
明 応 8	1499	夷島上国淨願寺創建される。(『藤原姓菊池氏弥高山菊池院淨願寺系譜』)
永 正 元	1504	蠣崎高廣(光廣二男)、泊の館主となる。(『松前年代記』、和田本『福山秘府』) 夷島上国淨願寺、秋田に撤退する。(『藤原姓菊池氏弥高山菊池院淨願寺系譜』)
永 正 9	1512	アイヌの蜂起により宇須岸・志濃里・与倉前の 3 館が陥落。 (『新羅之記録』、和田本『福山秘府』)
永 正 10	1513	松前大館、アイヌの攻撃により落城。大館館主の相原季胤、同補佐村上政儀ともに自害。この時、僧侶や儒賢ら多数殺害される。(『松前年代記』、『新羅之記録』、和田本『福山秘府』、松府旧事記)
永 正 11	1514	蠣崎良廣、父光廣とともに、小船 180 余隻に乗り列ねて上ノ国より松前大館に移住。(『松前年代記』、『新羅之記録』、和田本『福山秘府』、『松前志』) 寺社を上ノ国より大館に移す。(『松前年代記』) 泊館主高廣をして上ノ国を守護させる(勝山館に移住か)。(『松前年代記』、『福山秘府』) 紺備後広長、檜山の安藤尋季(政季の嫡孫)より夷島を義廣に預け、宜しく国内を守護すべきの判形を得る。よって諸国より渡来の商船旅人より年俸を徴して、その過半を檜山に上納する。(『松前年代記』、『新羅之記録』)
大 永 元	1521	高廣没。息男基廣をして上ノ国を守護させる。(『松前年代記』、『福山秘府』、『松前家記』)
享 禄 2	1529	西部アイヌの長タナサカシ、上之國和喜の館を攻めるが、良廣に射殺される。(『松前年代記』、『新羅之記録』、『工藤家年々秘録』)
天 文 5	1536	西部アイヌの長タリコナ(タナサカシの婿)、良廣に殺害される。(『新羅之記録』、『松前年歴捷徑』、『松前旧記』)
天 文 17	1548	上之国泊の館主・蠣崎基廣の謀反露頭し、季廣(良廣長男)に討たれる。(『新羅之記録』、『松前家記』、和田本『福山秘府』) 脇本館主・南條廣繼をして上ノ国を守らせる。(『新羅之記録』、『松前家記』、和田本『福山秘府』)
天 文 18	1549	基廣の陰謀露見は毘沙門天王の擁護によるとして、季廣、上ノ国天河に毘沙門堂を修造。(和田本『福山秘府』、『松前旧記』)
天 文 19	1550	檜山屋形の安藤舜季、国状視察のため夷島に来る(「東公の島渡」という)。(『新羅之記録』、『松前家記』、和田本『福山秘府』、『厚谷家録』)
天 文 20	1551	季廣、東西アイヌとの講和が成立し、セタナイのアイヌの長ハシタインを天河郷中に招いて西夷の尹となし、知内のアイヌの長チコモタインを東夷の尹とし、「夷狄商舶往還之法度」なる。(『新羅之記録』、『松前家記』、和田本『福山秘府』)
天 文 21	1552	上ノ国和喜の城代南條廣繼の妻(季廣の長女)陰謀露見して自害。(『新羅之記録』、和田本『福山秘府』)
永 禄 7	1564	医王山頭陀寺造立カ(明治 26 年に夷王山と改称)。(『蝦夷喧辞弁』)
天 正 6	1578	正廣(季廣四男)、近州安土にて織田信長に拝謁。帰国後謀反、本意遂げず。(『新羅之記録』、『松前家記』)
天 正 19	1591	慶廣、九戸政実の反乱にアイヌを率いて参戦。(『東夷軍記』、『上杉古文書』、『松前家記』)
文 禄 2	1593	慶廣、肥前名護屋の陣で太閤秀吉に拝謁し、志摩守に任じられ、夷島支配を承認する朱印状を受ける。(『新羅之記録』)
文 禄 3	1594	山神社、天の川河口に創祀される。(『上ノ国村史』)
慶 長 元	1596	檜山番所を上ノ国に置くと伝わる(この頃、勝山館終末か?)。(『上ノ国村史』)
慶 長 4	1599	慶廣、徳川家康に拝謁、累世の系譜及び『狄の島の絵図』を呈上。氏を『蠣崎』から『松前』に改める。(『新羅之記録』、『福山秘府』)
慶 長 9	1604	慶廣、家康より国政の黒印状を発給される(松前藩成立)。(『新羅之記録』、『松前年々記』)
慶 長 15	1610	花山院少将忠長、渡海着岸、暫時上ノ国に滞在。(『新羅之記録』、『福山秘府』)
元 和 4	1618	イエズス会宣教師アンジェリス、夷島ツガの湊に着く。公廣(慶廣の嫡孫)、松前は日本ではないとして好遇する。(『アンジェリス第一次蝦夷報告』)
正 保 3	1646	『新羅之記録』成立。

※ 本年表は『新北海道史年表』(北海道出版企画センター 1992 刊)を典拠とし、適宜補筆作成した。